

旧巨椋池付近の水害地形と湖水位変化 Flood Landform of Ex-Oguraike and Its Water Level Change

植村善博

Yoshihiro Uemura

To make clear their origin and age of the flood landforms of ex-Oguraike and its environs, inner bank pond and gravel bar have been checked by aerial photos and old drawings. Inner bank ponds situated around Makishima and Higasimekawa of Uji City were formed by the floods of 1756 and 1868. Water level of Oguraike had been rising about 0.6m to 1m from 1711 to 1889 caused by rising of river bed of Yodo River. By 1900's improvement construction of Yodo River, water level had suddenly fallen about 0.4~0.6m., and the pond was dried up to change paddy field by reclamation at 1941.

1. はじめに

京都盆地南部には木津川および宇治川の形成した低地が広がり、水害の頻発地域となってきた。また、その下流部には巨椋池の巨大な遊水地が存在していた。演者は本地域の水害地形の特色と形成過程を明らかにすることを目的に自然地理学的研究をおこなっている。その中で、水害地形(洪水指標地形)として堤内池沼と砂礫堆の特徴、その形成過程と形成時期を明らかにすることが重要と考えている。また、歴史時代における巨椋池の古地理と水位変化について検討を試みた。今回は絵図資料などをもとに、宇治市槇島地区の水害地形および江戸前期から明治30年代までの巨椋池の水位変化を検討した結果を報告する。

2. 調査結果

(1) 宇治川左岸の槇島から向島までの間に22の堤内池沼(UL1~UL22)が分布していた(植村他2007)。このうち、槇島-東目川間に存在した堤内池沼の成因と形成年代を慶応四年(1868)のお釜切れを描いた『槇島村洪水絵図』および宝暦六年(1756)の破堤状況を描いた『槇島村破堤水損絵図』により検討した。その結果、前者の破堤に伴うおっ堀としてUL4, UL14が、後者の破堤によるおっ堀としてUL2およびUL7, UL8, UL15が形成されたことが確実になった。

(2) 巨椋池の水位変化を把握するために、大池と宇治川との間に広がっていた葦島地区を描いた絵図類を検討した。制作年代および描画精度の高いものとして以下のものを採用することにした。

- 1) 宝永八年(1711) 大池葦嶋絵図
- 2) 寛政2年(1790) 大池絵図

3) 文政七年(1825) 大池絵図

4) 明治22年(1889) 2万分の1仮製地形図

5) 明治42年(1909) 2万分の1正式地形図

図1)から図4)までの178年間において水位は徐々に上昇を続けてきたことが明らかになった。その上昇量は0.6~1.0mであると推定される。上昇の要因として下流の山崎-八幡付近における淀川河床の上昇とそれに伴う排水不良が重要と考える。その背景として流域における土砂流出の増加があった。山崎地区では17世紀後半に立て続けに淀川堤普請を願い出ている。また、小泉川の排水不良が進み、合流点を水無瀬村まで引下げる工事を行わなければならなかった。それでも、永荒沼が拡大し続けたことが記録から判明する。このように、近世中期から明治中期までの間巨椋池の水位は上昇を続けてきたが、明治30年代に施行された淀川改良工事により宇治川と完全に切離されたことで水理条件が一変した。また、宇治川流路が短縮・付替えられたことにより巨椋池の排水が促進され、図5)の明治42年地形図製作時点では水位が約0.4~0.6m低下したことが推定される。

(付記) 絵図類の閲覧にあたり、宇治市歴史資料館および久御山町教育委員会には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

植村善博他(2007) 木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史, 京都歴史災害研究, 第7号, 1~24.